

乳幼児期は、親と子の育ちのとき

～15年の時の流れとともに親子関係は変化した？～

東京家政大学准教授 同附属みどりヶ丘幼稚園副園長 佐藤 暁子

1 はじめに

乳幼児をもつ保護者を調査対象とした「幼児の生活アンケート」は、早いもので4回目を迎える。第1回目の調査対象児は現在、私が大学で教える学生の年齢になった。

児童学、育児支援について学ぶ学生たちと第4回のアンケート結果について、また、自分の幼児期について話し合ったり、今の時期と比較したりしながら、興味深く学習を進めることができた。私ごとではあるが、小学校3年生、5歳、2歳の孫たちは、第3回、第4回の調査対象児の年齢に該当しているので、この5年間の調査結果の変化にはとくに関心をもった。2010年の合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む子どもの数の目安）は1.37に少し増加し、子育て支援がいわれる中で、「心豊かでたくましい幼児期の育ち」を保証していくために、社会が子育て家庭の現状や課題を知り、真に支援すべきことを考えるきっかけとなることに期待したい。

今回の調査結果速報やこの報告書には、第1回の調査（1995年）から第4回（2010年）に至るまでの社会的な出来事や乳幼児関連の出来事についてまとめた時代環境年表（1990年～2010年）が参考資料として出されており（p.22）、時代背景や社会の状況、経済問題などを振り返りながら、子どもの生活について考えることができたのは特筆すべき点である。とくに母親の就業者が大幅に増えることで、産休、育休後の保育園入園希望も増え、待機児童の増加が社会の大きな問題となってきた。そのため、待機児童対策として幼稚園、保育園、こども園などでの長時間保育

や入園年齢の引き下げなど新たな施策がいわれるようになってきていると共に、小学校入学後の学童保育など放課後対策にも課題が生じてきている。以下では、今回の「幼児の生活アンケート」の結果での母親の就労に伴う幼児の生活にみられるいくつかの問題点に触れながら述べていきたい。

2 早寝早起き、睡眠時間と幼児の生活について

早寝早起きの傾向がますます強まった。これは、母親の就労に伴う勤務時間の関係で、出勤時間を考えるとやむを得ないともいえるが、平均合計睡眠時間との関係では保育園児は「午睡」で睡眠時間を補足している傾向がある。しかし、6歳児になると就学を見据えて午睡時間も減らす傾向にあるので、早寝早起きの両面で規則正しい生活をする事が望まれている。一方、夜遅い時間帯に子ども連れで買い物をする家族が増えてきているとの情報も聞かれる。就労のため昼間に子どもとコミュニケーションがとれず、それを補うために夜間に一緒に買い物をするらしいが、「幼児の健康な生活にとって」得策なのだろうかと考えてしまう。

3 習い事をしている比率が減少している今、家族のきずな作りを！

世界的な金融危機に伴う家庭の経済状況や、母親の就労時間の関係で保育時間が長時間化してきている状況から、習い事の比率が減少している。時間的、体力的にも帰宅後の

習い事に行く時間をとるのは難しいことや、経済的な理由が考えられる。

半面、食事の支度ができる時間まで、自宅でテレビゲームやDVD、ビデオなどを1人で操作して遊ぶ姿がみられる。「子育て」が「孤育て」にならないように、おしゃべりを楽しみながら、手伝いをしながらの夕食の準備も工夫していきたいものである。

時間的、経済的余裕がないならないなりに、家庭の中でこそ工夫してできる家族と一緒に遊ぶ経験や、夕食を囲みながら会話を楽しむという姿の中で育つコミュニケーションやきずな作りを大切にしていきたいと考える。たとえば、最近スピードを競うコマが子どもたちの中で好んで遊ばれているそうだ。小さくて安価で家族みんなで遊べる玩具としては場所を取らずに効果的であり、お父さんの出番になること請け合いである。子どもは遠くに出かけることよりも一緒に遊んでくれることを望んでいるのではないだろうか。一緒に散歩をしたり、遊んだり、おやつ作りをしたり、小さなプランターに種まきをしたりなど、今しかできない「モノより思い作り」をお勧めしたい。

卒論研究のテーマを策定する際に、「幼児期に絵本を読んでもらった経験がなかった。だから幼児と絵本についての研究をしたい」と言ってきた学生がいてショックを受けたことがある。1年間の卒論研究を終えて、その学生は「子どもにとって、絵本をいっぱい読んでもらったかどうかではなく、読んでくれる人と心と心がどうつながっていくかのきずな作りが大切だと思う」と述べていた。

4 乳幼児期は親と子の育ちのとき

子育てで力を入れていることについての質問に対して、人間関係作りや社会生活のマナーや生活ルールの習得、基本的な生活習慣や自立の習得など人間性を高める分野の重要性が認識されてきていると感じる。また、母親の子育て観については、「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい」という考えや「わがママを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい」という答えも増加してきている。少子化、核家族化、人間関係の希薄化により孤立した育児となったり、子育てに関する情報があふれる中で自分の子育てが不安になり、自信をなくし子育て放棄に陥ってしまう保護者を目にするが増えてきた。「育てたように子は育つ」という言葉を思うと、保護者には子どもに心からの愛情をそそぎ、子育てを楽しむゆとりや喜びをもって、子どもたちとかかわってほしいと願わずにはいられない。子どもは親の鏡であり、親は子どもにとって生き方のモデルである。自然界の小さな出来事や心温まる場面に出会ったときに、感性のアンテナにしっかりとキャッチし、自分なりの方法で発信していける親子の触れ合いの中でこそ、子どもたちは心豊かな子ども時代が過ごせるのではないだろうか。「乳幼児期は、親と子の育ちのとき」。15年間の時の流れの中で、子どもたちの生活は変化してきている心を通い合う親子のきずなは、これからも途切れることなく続いていくことを、私たち大人が見守り支援していくことが大切であると考えます。